

# 既存の環境資源をできるかぎり 生かす、港北ニュータウンの 基本計画立案のスタンス

川手昭二

## ——住宅地計画の目標

住宅地計画の目標は、人々に定住地を与えることである。定住とは、ある特定の住宅に住み続けることを意味するわけではないし、ある地域に一生住むことを条件として定義しているわけでもない。

ある人が、ある条件のもとで、ある期間をある地区に住んでみたとき、その住んでいた場所に愛着、住んでいて良かったとする実感を持つことができたとすれば、その地区は、その人にとって定住条件を満たした住宅地ということが出来る。従って、もしその人の条件が許されるならば、一生住んでも良い土地、ということになる可能性を具備している。

ケヴィンリンチは都市空間の性能規範を五つ挙げて<sup>注1)</sup>いるが、その第二で居住環境の「感覚」を指摘し、空間の「固有性」Identity であるとしている。多くの人は特別な場所に存在した

経験をもっており、その固有性を誇りと思っている。場所の固有性は「ここに居る」ことが「私は存在する」ことを確認させると指摘している。

また強い「親密性」familyity は場所感覚を作り出す。ある人々のいる風景や、子供時代の情景は、形態と親密性が同時に作用した場合である。「出来事」もまた「固有性」をもつ、特別な行事や儀式には相当の「感覚」をもたらす、と述べている。

ここで、リンチが指摘した「感覚」を備えた環境は、「定住」の重要な一側面を成している

と私は考える。リンチはまた、その第三で居住環境の「適応」Fit を指摘し、空間は人の行動の仕方に合わせて修正されるし、行動は所与の空間に合わせて修正されるとして、適応の両面性に注目している。すばらしいホールで見事に演奏される調整の良い楽器は、快適な適応感覚をもたらすも

## ——住宅地計画の目標

- 一 歳時記を内蔵した地域社会とは、どのような環境であるか
- 二 つくり変えられた新しい環境のなかで入居者達が、何らかの「美」や「祭事」を演出し創造することの難しさがあるとするれば、その原因は何か
- 三 港北ニュータウンで保全された既存資源および資源を入居者がどのように役立てることを期待したか
- 四 「ニュータウンの歳時記(ニュータウンの生活物語)を形成する過程である」ことを計画する

のである。それを達成するには、良い訓練と、良いものづくりの両方が必要であると述べている。

私は、これも「定住」の重要な一側面ではな

いかと思っている。そこで、そのような「定住」の側面を満たした住宅団地が存在していると仮定し、その中で居住している人達の「感覚」や「適応」を想定してみると、その住宅団地では、人々は、その環境を賞で、満足し、自分達の家族生活のリズムに合わせて空間を利用し、少し改良しながら、お互いに適応し合い、共感していることを楽しむために時間も調整し合っている。しかもそれぞれの自発性に従って調整が行われる。そのようなリズムと秩序を保った地域社会を想像する。

このように自発的に行われる行為の中に地域社会としての秩序を見いだすことができるのは何故か、私は、無意識の歳時記の如きものが、

各家庭に記憶されているからに他ならないと考

える。この仮想された住宅団地の行為や行事を記録し、整理してみると、歳時記ができ上るのではないか、この歳時記が、この住宅団地の生活のリズムや秩序を支えていることを発見するのではないかと想像する。

## 二——歳時記を内蔵した地域社会とは、

### どのような環境であるか

歳時記はもともと、農村社会や前近代的都市社会のものである。

現代の都市の中でつくり出すことは不可能なことではないのか。そこで、現在、私達が記憶しているあのなつかしい、伝統的な歳時記について考えてみたいと思う。

そもそも現在にうけ継がれた形式美や、歳時記は、代々改良され、付け加えられて現代に至ったものである。つまり、代々の人々が自分の先輩の遺したものに對する尊敬と、併せて批判を加える精神とが、改良、付け加えの源動力になつてきた。

家族、集落の行う歳事の体験のなかで、マツスに形成される美と感動を感受できる心をもつた人が原動力となつて、来る年も、来る年も、その与えられた自然環境と社会環境のなかで、

形式美を再現する。

しかし、時とともに自然も社会も変化するとその変化を感得した誰かが、前年に感受した形式美、儀式の中に潜む精神の本質をつかむことのできた誰かが、家族や集落を形成する人々の時代精神の変化を代表して改良や、付け加えを行うと、形式は変化し、人々はそれを受け入れて、その形式を皆で享受することになる。

農村社会においては、家族はそれだけでは存在できず、集落として歳時記に従つて共同生活が維持された。しかしそれを支える家族の積極的な協力がなくては歳事は発展できなかったはずである。

すなわち、家族としての生計を支え、喜びをわかち合える歳事であつて、はじめて維持発展できた。従つて、新しく改良されたり、付け加えられりした歳事は、どこかの家族で試行され、家族全員に同意された成果品であると考えればよい。つまり最初に歳事を創作し形式を生み出すのは社会の基本的単位としての家族である。

なぜ家族は歳事を創造するのかという問いには、なぜ家族は誰かの誕生日を家族の全員で祝うことを歳事化するのかを考えてみれば容易に理解できる。最初は愛にもとづいて誰かが祝いを行ったとする。その祝いは家族の全員にとつ

て幸福を実感させるであろう。来年も、昨年の思い出を再現したとすれば、それはやがて歳事化される。

歳事化された日は家族にとって、待ちに待った日であり、そのために準備がなされる。当日はクライマックスになり、家族の絆が確認され、皆が一心同体になる日だ。

そのための準備が、ある「美」を創造することがあれば、クライマックスの日に公表された「美」は来年をさらに美しく感動的にするため踏み台になる。

家族のなかで繰り返される「美」の創造は、家屋という去年と変らない舞台のなかで構築される。従つて家屋の不変性が「美」の拡大再生産に役立っている。

集落で行われる歳事は、家の内部から外部へ、さらに集落全員の共有空間たる社寺や広場を舞台として構築される。この場合も歳事が形式美化されるのは、集落空間の不変性に依拠していると共に、その行事を少しでも楽しく、まともりのある美しいものにしたいと願う集落民の心によつて支えられる。

集落の歳事の形式美は、各家庭のなかに蓄積され、その翌年、再び各家族からの発散のエネルギーが合成されて、集落の行事が実行される。集落全体で行うことによつて、家族内だけ

で行う行事よりもより華やかな彩を獲得する。しかし、その力の源泉は家族である。

以上のことを前提として、住宅地開発で「歳時記」を内蔵した地域を計画しようとするとき、重要な障害にぶつかることが指摘できる。それは、開発によって集落空間が大変化するということである。

頼みは家族を大切に、与えられた環境をエンジョイし、美しいものに変えようとする心をもった人の入居のみである。しかし、そのことを疑うことはやめよう。人は家族を大切にすることだ、人は美を求めているのだと信じて、論を進めよう。

三——つくり変えられた新しい環境のなかで  
入居者達が、何らかの「美」や「祭事」を演出し創造することの難しさが  
あるとすれば、その原因は何か

入居者たちが、住宅団地でどんな歳事や形式美を生み出そうとして、努力してきたか、ということを考えてみる。

これまでの住宅団地の年令階層分布をみると団塊をなしていることがわかる。入居当時は乳児を抱えた世帯が主流で、やがて小学生世帯へと移行する。

子供の年令に応じて各家族は、それぞれの親が記憶している歳時記を復元して、子供を祝い、家族の幸福を確かめ合う機会をつかもうとする。

昭和五十年代前半までに家族を形成した親たちは、その子供時代の「ふる里」をもっている人が多い、従って大抵の親たちは復元すべき歳時記を記憶している。その頃までに建設された団地住居は2DKが主流で狭かった。狭い空間を使って祭事を行っても華やかにはなりにくい。一方外部空間は団塊を形成する同年令の子供の遊びを通じて、居住者全員の共有空間として、とらえられているので、歳時記は、団地の親たちによって外で復元されることになる。

しかしながら団地の親たちに記憶されている歳事の形式は、自然集落や下町かいわい景観のなかで形成されたものである。それを自然性から隔離され、下町の雑然とも異ったコンクリート主体の空間に再現しても、場違い、時にはアタクロニズムとして白けてしまうことが多かったのではないだろうか。

前述したように歳時の形式美は不変の空間を基礎として形成されるのであるから、突然変異したような団地景観のなかに、それも全国から大都市に移住してきた「異なったふる里」体験者たちの誰かの記憶によってなされる再現が、

しっくりしたものにならないのは当然といっ  
よい。

子供の誕生日、幼稚園で祝う七夕をきっかけとして親たちの記憶にある歳事が呼びさまされるときも、「記憶のなかにある形式」を表現する契機となりうる空間が、これまでの団地にはなかった。

それでも小さな住宅団地の場合には、いくらかの救いはあった。団地の外側にある社寺や商店街が催す行事を見に行くことができた。

しかしそれは、それぞれが団地の狭い2DK空間で、ささやかな家族の交歓を行ったあと、他人の集団が行う行事を眺めるだけのものではなかった。主体性はもちろんない、従って来年はこうしようという準備は、2DKのなかだけを対象としては考えられても、家から外へと連続したものと企画することがむづかしい。

昭和四十年代に入って団地の規模が大きくなるにつれて、住居と外部空間を、ある種の一体感をもった環境にしようとする試みがなされてきたことは確かである。しかし団地をベースとした、形式美を伴った歳事が定着した例は極めてまれなのではないだろうか。それは何故なのか。

よくいわれることであるが、これまでの住宅団地は、どこも画一的で、ブツキラボーで感性

がないものばかり。最近でこそ外壁を工夫したりして、商品差別化を行った団地が現れてきているが、いまだに小手先でただファッショ性を競う観がある。それぞれの団地にふさわしい住居空間があっても良いのではないかと指摘され続けている。

本来、住居群は風土を形成する一要素であったことを思えば、風土に根ざした住空間設計によって生み出された住宅団地がまれにしか存在しないことの方がおかしい。

風土に根ざした設計は、まず既存の自然環境、社会環境を把握し、そのなかに蓄えられた特性を生かして設計することである。もしそのような視点で設計行為を行ったとすれば、外部環境は普通千差万別なものであるから、団地はその立地によって、ひとつひとつ特色をもったものになるべきものである。

これまでの住宅団地設計で特色のある空間が生まれなかった原因として、次のことが考えられる。

(イ) 昭和四十年代までの団地住居の設計は量産化を目ざしたものが主で、標準設計も最小単価を前提としていたこと。従って、立地条件の差を考慮して多種類の設計を用意すること

を省略していた。

と有効宅地率に目を奪われる余り、従前の地形地物を大型土工機で平面化してしまおうとする傾向におちいった。その結果どの宅地開発も造成後の姿は同じような水平宅地の集合で、そこに建てられる住宅群も、その条件に合わせて同じような建物を並べることとなつた。

もし宅地造成計画が、工事前の環境を尊重してなされていたとすれば、造成後の地形は変化に富んだものとなり、あとで行われる住宅団地の設計もそれにつれて特色のあるものが生み出される可能性があつた。

ところで、これから筆者が問題にしようと思つて図していることは団地の画一性のことではなく、画一性を形として生み出してきた、宅地開発計画の考え方のことである。計画過程で、既存環境と断絶した空間を設計することを意に介さない、その計画の考え方のことである。

宅地造成が完成してそこに移り住む、子育て期にあるニューファミリーについて、さきに述べたように、歳時記の記憶を現在に呼び戻し再現するきっかけを与えてくれる環境が必要なのである。それもニューファミリーの親達の思い出と関係のある幾分伝統的環境が。

それは路傍の小さな石仏でもよい。何かのきっかけで祈りが始まる。もっとぜいたくを言わ

してもらえば、門構えのある古い家に門松が立てられている風景は、団地の入口や、個々の玄関の前を、正月には飾るうというきっかけを与えてくれる。まして近所に神社や寺院が保全されていればなおさらのことである。

大都市近郊の農業地帯を開発する区画整理事業では、このような環境を保全しようと思えば、いくらでも可能である。

いままでも宅地開発で捨て去られていた貴重な既存資源、それは (イ) ふる里を呼びさましてくる社寺・石仏などの原体験的風景 (イ) 創造を刺激するボヤけた空間、たとえば壊れかけた堀、境界のあいまいな竹林等、余白を残した描きかけのキャンパスのような空間 (イ) 小川、湧水池、畦道と農夫の見える風景など、コンクリート空間と異質な柔かい風景、などなどであった。宅地開発が環境を破壊するといわれるゆえんのは、人々の心の中に蓄えられた原風景を刺激する素材を消し去ったことによつて、人々による文化の創造や再建を困難にさせている状況を指しているのである。

四——港北ニュータウンで保全された既存資源および資源を入居者がどのように役に立てることを期待したか

(7) 自然地形を尊重したフォーメーション(造成後の高さ)計画は、起伏のある住宅地を生み出す。坂の向うに何かがあると思つて、どこまでも歩き続けた頃の思い出がよみがえる。坂の向うに何かを企画すれば、その思いは現実のものとなり、人々の共通の実感に支えられて、やがて歳事化する可能性がある。

(4) 樹林を保全する。港北ニュータウン地区の平地はほとんど耕されていて、樹林は斜面にしか残されていない。樹種は斜面に沿つて、頂上に近い方が乾燥に強く、低部にいたるほど湿気を好むものの分布をなしている。

住宅地開発ではどうしても水位の低下を防ぐことは不可能なので、保全する斜面は頂上に近くなるように計画することが好ましい。その上、頂上に近い方が傾斜もゆるやかになっている。谷部を盛土し頂部を保全することは造成効率の上からも有利である。既存樹林には鳥や蛇が巣を作つていて好奇心をさそわれる場所ではあるが、何かこわい。昔なつかしい野草を発見することもある。このような樹林は散歩コース選択では欠かせない資源である。港北ニュータウンでは、設計を始めるに当たつて残し得る斜面緑地を第一番に設定し、設計の前提条件に据えた。

港北ニュータウンではまた、設計を始めるに当たつて、計画目標設定のためにKJ法<sup>注(2)</sup>を実施

した。元禄以来代々住み続けて来たと自称する長老が、何とか小川を計画にとり入れるように主張した。たしかに小川は、この長老の少年時代の思い出の再現計画であつたに違いない。昔の早淵川とそこへ注ぎこむ幾筋もの小川は少年たちの全宇宙だつたかもしれない。別の集落民は「俺たちが管理して来た。あの富士山を残してくれ」と主張した。この山は先祖が土を持ち寄つて作つた山だそうである。昔、男たちが富士講を作つて、富士山の山開きに旅へ行つてしまつたあと、留守をまもる女房や子供たちのために作られた富士山のひな形である。留守番の集落民は山開きの日に集まつて、酒宴をもよおしたという。

もちろん、富士講の丘も、将来の小川再現計画の水源となる湧水の沼も設計の与件としての位置を占めることとなった。

(5) 宅地造成過程でこわされることとなる表土、野草、雑木を、新しい造成地の表面に移し替へをする造成計画がたてられた。

踏み込むと柔かくて、ちよつとすえた香りのする暖かい土の思い出を生産緑地として換地を受ける農地に再現するために表土は運搬された。

生産緑地は、港北地区の農家に蓄えられた農業技術を保全継承する場となることが期待され

<sup>注(3)</sup> 農業の歳事に従つて自然に沿つた営みに触れる場合は、大都市の近郊からどんどん消えていこうとしている。近郊農業生産物は軟柔野菜の芸術品といわれている。それを土の香りも新しいうちに手にできる朝市が出現すればまさに歳事になる。

えび根は公園として保全される樹林地に移植される。多数の農家の人たちから、KJ法の中で、桜ならこれが一番よいと主張された山桜は工事着手のつど移植して花見ができる公園や、散歩道の並木とする。

移し替へられたこれらの資源は、保存樹林と共に散歩道を補完する双壁となる。新しい住宅地では休日が家族の祭日になっていることを考え併せれば、休日の歳事の場合は、家族が全員で楽しめる散歩の道になる可能性が強い。路傍の野草を見つけて、名前を当て合う、写生をする、一ひひねる、それも四季で変化するまさに歳事である空間は、お彼岸の集まりや友人の集まりのあと「皆で外を歩いてみようよ」という休日の歳時記を形成するにちがいない。

造成に伴つて保存し、散歩道に移しかえられるものに、道祖神、馬頭観音などの石仏がある。これもKJ法の中で農家側から保全することを主張され、公的所有物として扱うことと同意を集落自治会から得た上で実行されている。

この資源は保全されることとなった神社・仏閣境内参道等と組み合わせられることによって、散歩コースにおけるひとつの目的地となることが期待された。もともと社寺は歳時記を内蔵しており新しい住民は、その歳時記に沿って散歩を計画し祭りに参加することができる。もし新しい住民が氏子になればなお更である。

(4) 屋敷林を残すことの意味は、これまで述べた文脈のなかにすべて生かされることになる。しかし、屋敷林は宅地であり、しかも従前の主な道路は屋敷をつないで走っていた。従って、屋敷林の道を専用の散歩道にすることはむづかしい。とはいえぜひとも散歩のメインコースに組み込みたい。

港北ニュータウンの屋敷林は北側樹林を背にし、南側は前面に道路および水路を隔てて水田がある。そこで水路の南側を散歩道として造成することにすればよい。自動車幹線の位置は別の位置に移すこととする。

小川に沿った散歩道からみると、その小川の向う側に伝統を守り続けた古い、大きな家が並ぶ。そこではきちんとした歳事が毎年くり返されている。

これらの樹林を交えた古い集落は、ニュータウン居住者たちの重要な散歩コースとなり、休日の歳時記では欠かすことのできない景観の一

部になり切ってしまうことが期待された。

五——「ニュータウンに入居した人々の生活領域の形成過程は、ニュータウンの歳時記（ニュータウンの生活物語）を形成する過程である」ことを計画する

港北ニュータウンはグリーンマトリックス手法を最初に試みた計画地であるといわれている。この手法はもともと、住宅地の戸外活動の諸要素と、活動の対象となる土地の諸要素との相関マトリックスを求めること、そして、その結果を用いて、如何なる土地要素に沿って住宅地の動線を計画するのが効率的であるかを発見する手法として考え出されたものだ。

すなわち、住宅地を構成する土地要素のネットワーク理論といってもよい。

しかしながら戸外活動を「日向ぼっこ」「土いじり」の如く定義して、土地要素との相関マトリックスを作ってみたとしても、その結果だけで動線計画を定めることは困難であり、適用の範囲も極めて限定されたものになる。

戸外活動を道路沿いに展開する計画を動線計画という。

活動に目的と目的地が明快に定められている場合には、道路の各区間に出発地と目的地が定

義できて動線計画ができる。

日常生活においては、通勤、通学、買物、通院など戸外活動の目的も、行為の内容も、行為の対象空間も明快で、目的地もはっきりしている。そして移動距離と時間は短い方が良いとする評価尺度も一致しているので、動線計画はすっきりしたものになる。

港北ニュータウンのグリーンマトリックス手法による計画は、日常的定型的活動の動線計画立案には役立ったものとなっている。しかしグリーンベルト構想立案については、必ずしも貢献はなかったと私は思っている。

その理由は、グリーンベルト沿いに展開される散歩や、遊び、趣味などの活動要素については、果たして何が目的であるかはつきりしない場合が多いからである。「何かいいことないかな」と思って、何となく外出して、何となくグリーンベルトへ足が向く場合も多いのではないか。

何となく外を歩く場合、見る対象、さわってみる対象、香りを感ずる対象等々を住宅地の利用と対応させて定義することがほとんど不可能なものばかりである。

このような行為の内容を定義して、行為の対象空間を規定する作業は困難であるため、相関マトリックスが組めないのである。

「ちよこ運動してこようかな」という場合はもう少しはつきりすることが可能だ。ジョギングし易い道が動線になったり、犬の散歩に適した道が動線となったりする。すなわち活動に適した空間を定義することが、やや可能になるからである。

「ただ何となく外出する」場合に、ただ何となく足の向く道や場所を規定できれば動線計画はすつきりしたものが得られるはずであるが、「何となく足の向く場所」は歩いた経験のある場所の記憶によって、定まるのであって定義をしようとしても個人差がありすぎて定義になり難い。

個人にストックされた印象が潜在意識となつて、何か行動を起こそうとするとき心の中に描き出される具体の空間システム（土地要素の組合せシステム）を生活領域注4)と呼んでおこう。

生活領域の定義によれば、各個人の生活領域は行動の繰り返しのおかげで、個々の土地要素の持つ意味を各個人が定義し記憶したシステムであるから、経験を前提としてはじめて領域が形成され、存在に至ることになる。

港北ニュータウンでグリーンベルトをマトリックス手法を用いて解こうとしなかったのは、あいまいな動機に対する生活領域の対応関係の理論が得られなかったからである。

港北ニュータウンのグリーンベルト構想は次の仮定を前提として組み立てられた。

これからの都市社会では休日こそ家族の祝日であり、その日を祝日に値する場所で家族が交歓しようとする欲求が強くなるであろうとする仮定。

また将来、東京圏の市街地はさらに拡大し緑林地はさらに縮小され、緑のもつ価値は増大するばかりである。従つて家庭や個人が休日を通す空間として、これまでは繁華街が求められていたが、緑に恵まれた散歩道に優るものはないであろうとする仮定。

これらの仮定の上に立つて、家族たちの休日の歳時記マップ作成のベースとして、港北地区で保全が可能な既存資源のネットワークキングを試みた。

ネットワーク化された既存資源が如何なる生活の物語を展開するであろうかを想像してみた。物語の想像は当時の設計グループのものであつて、別の人達がやれば、別の物語が生まれたであろう。従つて港北ニュータウンのグリーンベルト構想は、この点において科学性とは離れたものである。しかし一人よがりになることを避けるために、地元の人達や横浜市の数人のセクションの方々と、KJ法討議を何回も行った上で物語を作製した。

この物語に沿つて生活領域が形成され、歳時記がつくり上げられてゆくかどうか。

生活領域は行動のくり返しの上で形成されるのであるから、ニュータウンが完成し、人々が「定住」を感じることが出来る将来まで待たねばならないであろう。

港北ニュータウン計画作成のもとになった物語のあらずじを、土地利用構想決定の時に発行されたニュータウンニュース第一号から転載して、この小論を閉じることとする。

山田さんは、もう日曜日の日課になっている、ニュータウン・ハイキングをきょうも家で行うことにしているのです。

山田さんはトレーニングパンツにテニスラケットを抱えこみました。奥さんは海水着、子供達は捕虫網を持って出発です。

家の前には、いつも通勤や通学につかう歩行者だけの道がついています。近所の坊やたちが朝からローラースケートをやっています。ママ達はここなら安心して放っておけるのです。自動車にひかれる心配もなく、ご飯のときには「ゴハンですよー」の一声で呼び寄せられる範囲だからです。

この道の並木は近所の人達が区役所の人と相談して植樹し、世話も協力してやっています。

ですから隣人同士よく知り合った仲ですし、この道は自分達の庭の一部のような気がしています。

五分も歩くと、いよいよグリーンベルトです。昨日降った雨で樹林の葉はことさらにみずみずしく、これから歩く小一里の散歩が一段と楽しみになってきます。

幅一〇メートルの散歩道は住民達が区役所と協力しながら管理を行っています。

山田さんたちが世話をしている散歩道は、摘み草のできる道というふうに皆できめてあります。軽い屋根のかかったベンチがある距離を置いて配置されているので、春先には、孫をつれたおばあちゃんが、ゆっくり休みながら孫たちの摘み草を眺めている光景によく出会います。

山田さんたちの先には、お花見径の散歩道が続いています。四月には約一キロメートルにも達する桜並木が見事なものです。

散歩道には、すべて自然公園が接しているわけではありません。散歩道に接して自分も緑の多い庭を作ろうという気持ちをもつ人達が換地されました。この人達のおかげで散歩道は一層、

緑の深い帯になることができたわけです。

お花見径に面した庭の持主のある人は、自分も桜を植えて、お花見を豊富にし、ある人は美しい葉の木を植えて、お花見に変化を与えてくれます。

花見頃の日曜日は、ニュータウン中の人達が集まったのかと思うほどにぎやかですが、道も従ってよれます。それで、お花見頃はニュータウンの住民が交替で道の清掃に参ります。

人々は散歩道に沿った庭の持主に感謝の言葉を口々にのべますが、庭側の人達は「いや私の家はグリーンベルトという大きな庭を私の庭につなげて利用させてもらってます。一軒だけ離れていたら、こんな良い環境はつくれません。皆さんがグリーンベルトを大切にしてくれているのは、私の庭を大切にしてくれるようで、私の方こそ感謝したいと思っています」という答が返ってきました。

山田さんは、日曜日の朝の気持ちよい散歩の目的地につきます。中央自然公園とタウンセンターです。

タウンセンターにはスポーツランドがあつて

山田さんたちがついたときには、もう奥さんの友達が水着に着替えて、芝生の中にポッカと作られた屋外プールで山田さんたちをはなやかに迎えます。子供達は捕虫網を持っていつの間にか自然公園の中にもぐり込んでしまったようです。お腹が空けば、みんな勝手にママの泳ぐプールサイドに戻ってきて、屋外レストランでにぎやかな食事が始まります。

山田さんは、「ああ、これで子供達にも、幸せな思い出を作ることができると思っている、パパの満足感がいっぱいになってきました。

△筑波大学教授V

(注)

(1) ケヴィンリンチ「居住環境の計画」彰国社、

(訳) 三村翰弘

(2) 川喜田二郎「発想法」中公新書

(3) 港北ニュータウン建設研究会「新しいまちづくりのために」昭和四十八年度報告書

(4) 鈴木成文「生活領域の理念」建築計画学

第5巻第16章 丸善出版